

《動向・紹介》

大津留厚編『「民族自決」という幻影 ——ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国家の成立——』

中山 真由香

本書は、ハプスブルク帝国が存在した地域にあたる中・東欧の歴史について1918年を核として論じたものである。ハプスブルク近代史を専門とする編者を中心にして、中・東欧地域の研究者による一つ一つの論考が集うことにより、旧ハプスブルク帝国地域の現代史の再構成に向けた新しい出発点を提供する。

本書の表紙には旧約聖書に登場する「バベルの塔」が採用されている。「バベルの塔」といえば人類が多数の言語を持つに至った経緯が描かれた話であるが、編者はハプスブルク帝国をこの「バベルの塔」の逆再生した物語になぞらえる。つまり多言語世界において人類が再度「バベルの塔」を作ったとしたら、その歴史の必然性については肯定できないものの、多言語国家ハプスブルク帝国の姿を見ることができるといふ。

ハプスブルク帝国はかつて「諸民族の牢獄」といわれ、その解体によって「民族自決」の理念に基づく国民国家が成立した、という言説が流布してきた。しかし近年ではハプスブルク帝国が諸ネイションの発展を阻害してきたという見解よりも、ハプスブルク帝国と諸ネイション発展の相互作用への注目がなされるようになってきた。また、民族ではとらえられない集団にとってのハプスブルク帝国像を検討する研究も進んでいる。こうした近年のハプスブルク帝国の再検討によって、帝国崩壊から諸国民国家への連続性が注目される中、ハプスブルク帝国の継承諸国家を研究する者にとって、帝国崩壊とされる1918年の重要度は高い。

では、帝国と帝国崩壊後の世界はどのような接合点を持ちうるのか。こうした関心ゆえに、三部から構成される本書の各部の題名には、共通して「はざま」という言葉が用いられている。

第Ⅰ部「アイデンティティのはざままで」では、民族ではとらえきれないアイデンティティ集団からみた帝国崩壊後の世界のとらえ方、そして帝国から新生諸国家への変容に伴う自己認識の変遷が取り上げられている。第1章ではウィーン・ユダヤ人からの視座、第2章ではセルビア義勇軍からの視座、第3章ではボスニアのムスリムからの視座、第4章ではトランシルヴァニアの若手研究者の視座から、1918年前後での世界の有り様をとらえようとしている。

第Ⅱ部「連続と非連続のはざままで」では、行政の制度面に現れた継続と変化、そしてそれに関わる現場の人々の在り方に着目して各論が展開される。第5章にカルパチア山麓地域から眺めた国民国家の様相が、第6章では帝国崩壊後のチェコスロヴァキア行政改革の事

例が論じられる。第 7 章でウィーンにおけるチェコ系学校からの視座が、第 8 章で大戦後の国境策定に関与した日本人からの視座が提供されている。

第 III 部「記憶と記録のはざままで」では、現在とも関わりが深い記憶の根拠となる文書や構築物の所属を、帝国崩壊後いかに管理し、また理解したかについての論考が集まる。第 9 章では、ハンガリーとオーストリアに関する文書管理について、第 10 章はプラハ協定を主に挙げながら旧帝国文書の管理に関するオーストリアと新生諸国家との二国間協定について論じられる。第 11 章は、帝政期に発展した都市を国民国家の中でどのように保存・記憶するかについて、第 12 章ではサラエヴォ事件をめぐるオーストリアの記憶について論じられている。

上記で見ただけでも各論で挙げられる事例の多様さはよく分かるが、このことは英語タイトルにも表れている。本書の英語タイトルで用いられている **Overloading** という単語に注目してみよう。これは「積みすぎる」を意味する **overload** という動詞の **ing** 形であるが、**ing** 形で辞書を引くと、「多重定義」という訳も存在する。このことを踏まえて英文タイトルを訳せば、「民族自決の多重定義」ということになる。この意味合いは、カバー袖に登場する「民族では割り切れない人びとの世界に焦点を当てて、国民国家と『民族自決』を問い直す」という言葉でも表現されていると読み取ることができるだろう。本書は「民族自決」という言葉によってあらわれる幻影ゆえに見えなくなっていた当地域の歴史に更なる奥行があることを気づかせてくれる。

各筆者の研究自体がその専門性ゆえに一見大きな地域に開かれているものには見えないかもしれないが、個々の論考が一つの本に集まることで、1918 年をめぐる世界像を広く立体的に捉えることが可能となっている。各論考の事例を読めば、「民族自決」という言葉にとらわれない人間の有機的な動きを垣間見ることができるだろう。

(A5 判 344 頁 2020 年 11 月 昭和堂 税別 3000 円)

(京都大学大学院修士課程)